



確かに継続は力になる
被災地ボランティア記②

昨年末、被災地の岩手県大槌町を訪れた体験を「被災地ボランティア記」と題して書いてきたが、今回でひとまず終わる。「ひとまず」というのは三月末から再び大槌町に妻も連れて行くことにしたからだ。四月から四つの目で見た被災地の現状を改めて書きたい。

ボランティアから帰り、一過性でなく継続して取り組める運動を始めたのと考えた。と、妻は「一食を捧げる運動」を始めようという。東日本大震災の復興は時間がかかる。この問題を自分たちのこととして関わり続けるために、自分の生活の中に取り入れるというのには確かにいい。

「多少、体が不自由でも大槌を見に来て下さい。部屋も用意します」と有り難い返事。そこで前回の「冬休み被災地ボランティア」に続いて山口教会が中心になって実施している「春休み被災地ボランティア」に加えてもらった。

大槌町にもう一度行くかと思つたのは、もう一つ理由がある。団長の柴田神父から「春休みのボランティアには小学校六年生の子供も参加する」と聞いたからだ。

彼女は前回のボランティアに参加を希望したが、お母さんから「旅費を自分の小遣いでためてから」と言われ、お年玉などをためて、今回参加するという。どんな育て方をされた子だろうか、ぜひ一緒に活動してみたいと思つたのだ。

先日、打ち合わせ会に行き、その子とお母さんに出会つた。と、お母さんが「藤屋さん」と抱きついてきた。昔、中・高校生の日韓合同キャンプをした時のやんちゃ娘が四人の子供を持つ立派なお母さんになっていた。

仮設住宅にはオーブンがなく、自宅でケーキを焼いて、この巡礼記ももう七年になる。根気のなかつた私も継続して少し変わった。東日本の被災地とも継続して関わり続ける中で何か新しいことが見つかるだろう。



復興住宅建設と思つたら被災した建物を取り壊すための足場だった



大槌支援のおおちゃん人形

彼女の長女が今回、参加するというのだ。自分も行きたいが、一番下の子供がまだ三歳で無理と残念がる。日韓合同キャンプに参加した血はお嬢さんに受け継がれており、本当にうれしい。

ところで前回、参加を決めた時、団長の柴田神父から「何かできることがありますか」と問われ「酒を飲むこと」とも言えず「ケーキを焼くこと」と答えた。妻が病気をして左半身にまひが残り、得意のケーキづくりを私が引き継いだ。継続は力というが、お世辞もあろうが私のケーキは評判がいい。しかし仮設住宅にはオーブンがなく、自宅でケーキを焼いて